

2026 年度 日本泌尿器科学会 (JUA)/米国泌尿器科学会 (AUA) 交流プログラム

2026 JUA/AUA Academic Exchange Program 参加報告

石 原 弘 喜 (東京女子医大)

この度, Washington DC にて開催された AUA 2026 に参加し, その後 JUA/AUA Academic Exchange Program を通じ, シカゴにある Loyola University にて約 2 週間研修いたしました。

AUA 2026 は私にとって通算 10 回目の参加となりました。毎回参加する度に, 新たなアプローチによる知見や機器および手技の新規開発に関する発表を目の当たりにし, 常に刺激を受けております。今回の AUA でも, 尿路上皮癌や腎癌に対する周術期治療や single-port robotic surgery に関する複数の演題が発表されており, 大変勉強になりました。AUA 期間中に, 私を含む各国の Exchange Program 採択者および支援してくださっている関係者の方々が一同に揃う豪華な reception に招待いただきました。私と共に本プログラムに採択された東京大学の亀井潤先生と約 10 年前に採択された名古屋大学の井上聡先生と reception に参加し, 各国の先生方

とも交流を持つことができ大変貴重な時間を過ごすことができました (図 1)。この reception は一度, 本プログラムに参加すると毎年招待をしてくれるようで, AUA の高いホスピタリティを実感致しました。

AUA 終了後, シカゴに移りました。Loyola University は米国のハブ空港であるオヘア空港から車で約 30 分と非常にアクセスのよい場所にあります。シカゴ都市部からも車で 50 分ほどの場所に位置しており, 落ち着いた郊外の街にある広大な大学病院です。5 つの関連病院を有しており, 私は main campus である Loyola University Hospital (図 2), 最も大きな関連施設である Gottlieb Memorial Hospital, そして Edward Hines Jr. VA Hospital (米国最大かつ最も activity の高い VA 病院だそうです) にて, 手術や外来見学, および tumor board やレジデント・フェローが参加する勉強会などのカンファレンスに参加しました。



図 1 AUA 期間中の reception にて, 各国の Exchange Program 採択者および関係者と (筆者: 右端下段)



図2 Loyola 大学のメインキャンパス

手術は毎日7:45から始まり、多い日には1日15~20件の大小含めた手術が行われていました。例えばmajor surgeryでは、1日で前立腺全摘術3件、腎部分切除術3件、reconstruction surgeryとしてロボット手術によるpsoas hitchの後に単純膀胱全摘・回腸導管造設術、といったように非常に濃密なスケジュールが組まれており、毎日、大体19時ごろに帰宅というタフな毎日を過ごしました。ある日には、数日前に緊急入院してきた腎癌IVC塞栓level IIIの症例がオンコールで緊急手術となったケースもありました。まさかの開胸・体外循環下の手術となり、心臓血管外科・消化器外科のシニアドクターが勢ぞろいするという、年に1,2回しかないという大手術にも立ち会うことができ、非常に稀で貴重な経験を得ました(帰宅は23:00でした)。

定例の手術は基本的にはアテンディングの指導のもと、フェローとシニアレジデントの先生方がメインでこなしておりました。30代半ばのフェローが積極的に手術を行い、かつ後輩を指導する環境は日本国内ではあまり見ることはできず、しっかりとした教育システムが整っているLoyolaの環境に感銘を受けました。病院内外で私のケアをしてくださったのは、フェローのDr. Duでした。彼の手術や指導は非常に丁寧で、指導医やレジデントからも慕われているのがすぐに分かるナイスガイでした。実は、滞在中のホテルはAUAが手配してくださったのですが、Loyolaから約12マイル離れている辺鄙な場所にあり、正直、かなり生活に困りました。Dr. Duはそのことを気遣ってくださり、ほぼ毎日ホテルまで送ってくれたり、途中スーパーマーケットに寄って日用品や食事の買い物に付き合ってくれたり、本当に親身になり助けてくれました。彼には感謝してもしきれないほどです。

また、約15年前にAUAとChinese Urological Association間でのExchange Programを通じ中国への研修経験があるProf. Quekも非常に親切にしてくださりました(図3)。彼の専門領域はurologic oncologyで、中



図3 手術室にて。左からDr. Du, 筆者, Prof. Quek

でも膀胱全摘を得意とされております。彼について最も感銘を受けたのは、外来では患者さんとしっかりと対話し、世間話などしながらコミュニケーションを取り、必ず視診・触診を行うなど、患者さんに寄りそった診療を実践されていたことです。これは本来当たり前のことなのですが、日々の忙しさを言い訳にして実践できていない自分にとって、非常に大切なことを思い出させていただきました。

私は腎癌を専門の一領域としておりますが、2001年にNew Engl J Medから出版された、サイトカイン時代における転移性腎癌に対するcytoreductive nephrectomyの有効性を証明した超有名な論文のfirst authorであるProf. FlaniganはLoyolaの方であることを知りました。さらに、腎部分切除術後の腎機能や腎代償性肥大(volumetric studyなど)の研究分野で著名なDr. Steven Campbell(現West Virginia University, 前Cleveland Clinic)もLoyolaに勤務されていたことがあるなど、腎癌分野でも多くの著名人を輩出されている施設で研修することができたのは、私にとって非常に感慨深いものでした。腎癌を専門とされているProf. Guptaとも親交を深めることができました。彼の腎部分切除術におけるポリシーとして、出血コントロールができていればinner sutureもrenorrhaphyすらも必要なく、止血剤を用いた圧迫で十分であり、この手法の方が早くシンプルで、かつネフロン保護による腎機能温存にも寄与する、というものがあり、これに関しdiscussionできたことは非常に有意義でした。さらに、彼は新たな試みとして、ホルミニウムレーザーを用いた腎部分切除術を行っており、色々なことにchallengeする彼の熱意やそれを可能とす



図4 ファカルティとの食事会にて（筆者：右手前）

る技術，さらにこういった試みを実現可能とする米国のシステムに感銘を受けました。

勤務終了後には複数回食事会を開催してくださり，ChairmanであるProf. Gonzalezを含む多くのファカルティも同席してくださいました（図4）。また，水曜日朝7時から始まるレジデント・フェローを中心とした勉強会ではリサーチカンファレンスも行われており，私も自身の臨床や研究テーマについて発表する機会をいただきました。

最後に，今回のExchange Programに参加するにあたり，多くの方々からサポートをいただきました。本プログラムにご推薦いただいた東京女子医科大学の高木敏男教授，快く送り出していただいた医局の皆様，そしてJUA・AUAの関係者の皆様方に心より深く感謝申し上げます。本プログラムを通じて得た経験を，自身の今後の臨床や研究活動，そして後輩への教育に活かしていけるよう，日々精進いたします。